

令和3年度 第3回 福祉援護センターのあり方に関する懇話会議事録

日 時：令和3年12月16日（木） 10時00分～11時00分

会 場：横須賀市役所分館1階 福祉部会議室

出席者：当日配付資料の委員名簿参照（欠席者なし）

1 開 会

2 議 事

事務局より、本日の議論、資料について説明した。

各委員からの意見は、以下の通り。

- ・今年度の進路状況について。

本校の横須賀市の生徒は19名中、生活介護15名、地域活動支援センター1名、就労継続支援B型2名、未定1名。また、分教室の生徒は8名中、生活介護1名、地域活動支援センター1名、就労継続支援B型3名、自立訓練1名、特例子会社1名、一般就労1名。

現状として、生活介護を依頼していく中で、定員ぎりぎりになっているというお話を聞いている。今年は何とか受け入れてもらったが、来年、再来年はさらに厳しくなるという手応え。来年度卒業する生徒は学年全体だと21名で、多くは横須賀市のケース。分教室は7名。

- ・3年生は知的障害に限ると、まだ確定していない生徒もいるので、あくまで見込みだが、48名中、生活介護12名、地域活動支援センター3名、就労継続支援B型14名、就労移行支援11名、特例子会社2名、一般就労5名。例年は3割近くが一般就労だが、今年度は生活介護に進むケースが多い。

2年生は後期で実習に行った生徒30名中、生活介護2名、地域活動支援センター2名、就労継続支援B型7名、就労継続支援A型1名、就労移行支援5名、特例子会社1名、一般就労8名。3年生と比べると、一般企業、特例子会社で実習している方が多いが、チャレンジの段階なので今後、どう変化していくかは、わからないという状況。

- ・今年度卒業する予定の生徒の進路先を見ていくと、どちらの学校も生活介護に進路として、選択されている方がニーズとしては高いと伺える。次年度以降についても、生徒の人数や進路の希望についてわからないが、生活介護を卒業後の生活の基軸になるような通所施設として希望される方が出てくることが推察される。

今年度の議論で、就労移行支援をかがみ田苑で継続するかどうかは一定の方向性が見えている。かがみ田苑のあり方として今年度は就労移行支援に着目していたが、次年度以降は、就労移行支援以外の事業について検討する必要性が出てくる。これが必要ではないかなど、

意見等があれば伺いたい。

・生活介護が不足し始めていると、話を聞いて実感している。かがみ田苑の生活介護の期限6年だが、延長されている方も多く、なかなか地域に出ることができない、環境的に出られないことも含めて、その方たちの対応としてどう移行できる体制を作っていくのか。かがみ田苑に限らず生活介護について、どのくらいの人数が必要なのか、今後どうすべきか、数値の裏付けをしていかなければならない。

もう1点、かがみ田苑の地域活動支援センターの意味は何なのか。生活介護の従たる事業所にしないで地域活動支援センターを維持しているということが何か役割や意味があるのなら、そこが明確にならないといけない。かがみ田苑の問題もそうだが、横須賀市内の地域活動支援センターのあり方を今後どうしていくのかということも、大きくかかわってくる問題ではないか。その議論をして道筋ができれば良い。

・必要な資料として、現在に限らず過去の経緯についても整理をしながら、例えば、以前は4年の利用期限の通過型で、次の社会資源が見つからずにそこに留まっている方も多くいた。そして6年になった。かがみ田苑の生活介護の利用期限6年を超えて利用している方がどのくらいいるのか、なぜ移行ができないのか状況などを含めて必要。

・利用期限が最初は3年。それから4年、6年となった。通過をするということ自体が困難。初期の頃は作業所が多くできていた時期だったので、かがみ田苑から作業所へ移った方がかなりいた。それが作業所という制度そのものがなくなり、生活介護や地域活動支援センターとなった。横須賀市はまだ作業所が残っているが、新たに増えるという状況がない中で4年、6年という形になっていったのではないかと思う。

・現状は6年という中で、次になかなか移行できない実態の理由の把握が必要。そもそも6年をどう考えるか。あわせて検討の必要がある。

もう一つは、かがみ田苑の地域活動支援センターのかけはしの意義についてもう一度検証する必要がある。30年前であれば養護学校等を卒業して一旦かがみ田苑に入り、その間に保護者や支援者が運営委員会方式などで作業所などを立ち上げていったので、通う場所を次々に作っていった歴史があるが、今は、障害福祉サービスや法律も変わっていき、方向性として地域活動支援センターを作っていくことではない時代、保護者たちが自分で事業を立ち上げ、作業所を作るのもマンパワー的にも厳しい状況の中で、かがみ田苑の通過型の施設として果たす役割は何か、しっかりと議論して方向性を出していく必要がある。地域活動支援センターの意義についてもあわせて検討する必要がある。

さらに必要な資料として、地域活動支援センターの市内のストーリーというか、どのように増えてきたか、今は、地域活動支援センターも生活介護に転換したということもあると思

うので、その実態も必要。

・付随した話になるが、今年度の卒業生 19 名中 5 名が第 2 かがみ田苑を希望して返事を待っている状態。以前は送迎のためのバスがあったが、現在は移動支援の事業所が見つからないので、保護者が困っている。現在、通学の際に利用しているが、どこの事業所も移動支援はやればやるほど赤字だと聞いている。学校の生徒が中心にお世話になっていて、ちょうど、かがみ田苑の始まる 10 時から 16 時で学校の送迎とかさなる。移動支援を利用せずに送迎ができる保護者は良いが、できないとバスを 3 本乗り継いで、実習に行ったという事例もある。お金のことも絡むが移動支援も含めて、かがみ田苑のあり方を検討いただければと思う。

話は変わるが、在学中は放課後デイサービスをほとんどの生徒が使っていて、15 時頃に学校が終わり 18 時頃まで放課後等デイサービスを使って、18 時半、19 時頃帰宅していたので保護者も仕事をできたが、18 歳になっていきなりなくなってしまう。進路面談をしていても、重度のお子さんで 18 歳になったからと、一人で待てないのに 15 時に帰ってきて、親が仕事をやめろということか、と涙ながらに訴える保護者もかなり多くて、日中一時支援という枠もかがみ田苑の中で考えられると、卒業後も家族の生活を変えずに本人は生活ができる。

・立地条件として、海が近く見晴らし等は良いが、アクセスのしにくさがあり、移動のところで困難を感じている実態がある。在学中の生徒は放課後等デイサービスを使いながら、家族は仕事などしているが、卒業後はそのサービスがなくなってしまう、日中一時支援は使にくい、またサービスとしては事業所が少ないということから、今までの生活がガラッと変わってしまう。そこで公立の施設としての役割として果たすことはできないかというところも議論として挙げていく必要がある。今は、久里浜からかがみ田苑までのバス送迎はあるのか？

・事務局

現在はバス送迎ではなく、キャラバンで JR 久里浜駅から施設まで送迎を行っている。付き添いの職員は同乗しないため、自分で車の乗り降り等ができる方のみとなる。

・学校教育を終えて、社会に出るのは 18 歳だが、どのような力をつけておいたら良いのか。生活介護、就労移行支援、就労継続支援 B 型の事業所を通して、利用者に言っていただくことが必要。養護学校でも入れ替わりが多く、養護学校の経験も浅い職員も多い中で、勉強に特化しすぎていて、外に出てからどういう生活するかイメージできない、イメージを持たない中で日々の指導しているため、発信をしてもらいたい。そういったことで生徒も変わっていった、かがみ田苑以外でも生活できる生徒が出てくるかもしれないので、ヒントをどんどん頂きたい。

・卒業後の生活はイメージできないという話は私もよく聞く。どんな人生を歩んでいくのかというところで、早期療育もそうで、今、目の前にいるお子さんに、取り組んでいる取り組みが一体どういう意味があるかわからずに支援されていることもある。学校現場でも、卒業後、今は人生 100 年の時代と考えると 5 分の 1 程度で、残りの 80 年間でどのように過ごすのかというイメージの共有も必要になってきていて、一人の人生をイメージした中で学齢期に何が必要なのか、大人の支援しているところと、学校現場や学校に入る前の未就学のところからも情報を共有しながら、その人の人生に歩み寄る支援を考えていくことが大事。かがみ田苑のあり方に限らず、障害のある方、支援者も学校の先生も療育に関わる方も含めて一緒に考えていく機会があれば良い。

・学齢期の段階にどんな力をつけていったらよいかというところだが、支援教育課で就労相談会という大きな企画を年 1 回開催している。皆さんと一緒に参加させていただき、実施しているがこれの意義はすごくあるのかなというところ。特別支援学校だけでなく通常の市立の小中学校、市立の高校もあるので、皆さんで考えていかなければいけないと強く感じた。令和 2 年、3 年はコロナで開催できず、今年度は資料提供という形で行ったが、やはり会場を大きく使ってやっていくということが大きいと感じた。こちらを頑張っていきたい。

・それぞれの立場で取り組まれていることをまずは共有しながら、どこで何をやっているのか現場にいるとわからないこともたくさん出てくると思うので情報を共有しながら、かがみ田苑を中心として、サービス全体のことも含めて検討していけたらと思う。

・かがみ田苑の利用者がいないというところで役割がなくなってきた部分もあると思うが、一つだけ気になるところがある。市内の就労移行支援事業所、20 人規模の小きなところが多く、ほとんどが賃貸でビルの一室を借りていると記憶している。就労移行支援の対象者の中には、環境に配慮することで働ける利用者もいる。

今後、そういう利用者は、市外の事業所を使っていくのか、市内の新たな資源が出てくるのか、そういうところが議題に上がると良い。賃貸で小さくやっていると、配慮しにくい部分があり、どうしても人同士の距離が近くなってしまい、他者が気になる方が通所しづらい。でも、配慮することで働ける利用者もたくさんいる。かがみ田苑の環境や施設がその部分で魅力的なこともあったと思うので、そういう利用者が、今後、地域の中で働ける可能性があるのに資源がないので、就職につながらないということにならないように何かしら手だてがあれば良い。

・事業の特性として、アクセスのしやすさ、就労に結び付くというところでは、情報も集約されなければいけない。特に企業の場合は、都市部に多いことを考えると、立地条件は都市

の中心部に置かざるを得ない。でもそこは賃貸物件になるし、家賃の関係等で広さが取れない。そうすると、行き届いたサービスを提供することが難しい。

その一方で、広い豊かな環境を求めるとアクセスのしにくさによって、就労に結び付かない状況が出てくるのかのかもしれない。両方のいいところをうまく実現できるかということもあわせて、サービスのあり方も検討していく必要がある。

かがみ田苑の使い方として、求められる役割と、今ある環境等を含めて、より良い社会資源として機能するのかというところは、色々なアイディア等を出して行って、公立施設としての役割を継続して考えていく必要がある。

・今後、市全体として、生活介護のことを考えていかなければいけない。前回の懇話会で、「預かる」と「支援」は違うという話を聞いたが、かがみ田苑は6年の有期があるため、その点も踏まえた中で考えていく。当然、費用的な問題もあるし、その中で、かがみ田苑だけでなく、全体的なこととして、今後考えていかなければならない。

・「預かり」と「支援」は難しい。放課後等デイサービスは、誰のための支援なのか。障害のある子ども、保護者、どちらのための支援なのか。放課後等デイサービスに行くと、預かるという感覚が非常に強くて、積極的に支援をするというのはどういうことなのかも含めて、支援とはそもそも何なのか、何のための誰のための社会資源なのか、一つ一つ目的を整理しながらその機能を考えていかなければならない。本人の願いや希望と、家族の願いと支援者ができることはみんな違う。知的障害があると本人の言葉でストレートに言えないので、家族が意思を代弁している。そうすると、サービスを提供するときは、本人の意思より家族の願いに寄り添いがちになり、本人は置いていかれる。本人がどんな人生を歩みたいのか、何を求めているのか、しっかり考える必要がある。

その一方、家族のニーズにも向き合い答えなければならぬ。当然そこには矛盾が生じる。矛盾に向き合うには皆で一緒に考えるしかない。支援すること自体、懇話会の役割ではないかもしれないが、障害とくらしの支援協議会や、ネットワークを使って話し合う場を作っていかなければならない。

ひと通り、ご意見、ご発言をいただいた。

次第の『議題（1）本日の議論について』は、一定の方向性として、かがみ田苑の就労移行支援の役割は終えたということで理解していいのではないかと。それを共有したうえで、今後、検討すべきこととして

○かがみ田苑の生活介護のあり方について（有期限を含めて）。

○地域活動支援センターを持っている意義。過去のデータ等の資料が必要。

○送り出す立場の先生に、生徒を送り出すにあたり、どのような支援・教育・学校ですべきことがあるのか、というところの共有。

○市内の特別支援に係るところで、就職に向けた説明会等のイベントを含めた情報共有が

できたら良い。

3. 閉 会